

研究ノート

嶋田理論の再検証に関する一考察

——嶋田理論が提起したもの——

横 山 穰

はじめに

同志社大学名誉教授の嶋田啓一郎が他界したのは、2003年9月24日の早朝のことである。満94歳の誕生日を迎えるのに残りわずか3ヶ月足らずのことであった。遺族によれば、嶋田は100歳を越えて生きることを目標に、日々足腰の鍛錬を欠かさなかったという。同志社大学規定に従い1980年に定年退職後、かねてよりの念願であった読書三昧の生活を送りながら、常に日本はもとより世界全体の政治・経済の動きに関心を寄せ、とりわけ晩年は宇宙に関して思索をめぐらせながら、未来を模索する人生を全うした。

ところで、本論文は嶋田理論が与えたわが国における社会福祉理論への影響を再検証することを意図している。すなわち、嶋田理論の骨格となる構造・機能を再検討することで、嶋田理論が提起した社会福祉理論構築における諸課題について考察できればと考える。

ところで、嶋田理論は日本の代表的な古典的3大社会福祉理論の一つであるにもかかわらず、岡村重夫の岡村理論や孝橋正一の孝橋理論と比較すると、論文や文献等で取り上げられる機会は少ないという印象を受ける。その理由としていくつか指摘できる点がある。

例えば、嶋田理論には「人格」「価値」という概念が盛り込まれていることや、「社会

体制論」の視点に基づく「力動的統合理論」が基盤となっている点である。さらには、嶋田自身の生き方と重なるキリスト教的人間観・思想観を構成する「愛」や「正義」等の価値が根底にある点である。ほかにもいくつか理由を指摘できようが、こうした嶋田理論が包含する諸概念が相乗するなか、独自の社会福祉理論を体系的に構築したところに、嶋田理論の深さ、広さ、高さはもとより、嶋田自身の学究的姿勢の深遠さを垣間見ることができる。

ところで、嶋田理論の最大の特徴とされる社会体制論に基づく「力動的統合理論」や基本的人権を重視する「人格」や「価値」概念を理論的支柱に据えている点で、岡村理論や孝橋理論とは明らかに異なる。ちなみに、嶋田は同志社大学を卒業後、すぐに助手として採用された後、「社会思想」と「協同組合運動論」の両科目を担当することになった。やがて、学部では「社会福祉概論」と「社会保障論」、大学院では「社会福祉体系論」を担当し、独自の社会福祉の思想・哲学を構築したのである。

嶋田の研究功績として、とりわけ社会福祉の哲学や思想の根幹となる人間観や価値についてキリスト者の立場から考究し続けたことにある。「愛」と「正義」という2大命題について、エミール・ブルンナーが説いたよう

に「正義は愛に先行し、愛は正義を全うする」を嶋田流の福祉哲学の基盤とした。以下、嶋田理論の再検証を通して、嶋田理論が提起した社会福祉理論における諸課題について一考察を試みることにする。

嶋田理論における「力動的統合理論」について

嶋田は、具体的な社会制度が生起するのは、営利原則による資本蓄積本位（余剰価値の追求）のための労働力の保全・培養と産業平和のための資本運動が描く一つの円周（経済的視点）と、基本的人権に基づく生活構造の防衛と改善のための労働者並びに国民大衆の人格的要求（社会連帯勢力）が描くもう一つの円周（社会的視点）との交錯するところにあるとした。彼は、この2つの異なる円周同士が互いに勢力を拮抗させつつ絶えず力動的に変化しながら、弁証法的に統合されると考えたのである。いわば「経済的なるもの」と「社会的なるもの」との弁証法的統一こそが社会体制となって具現化されることになる。

嶋田はさらに、「社会関係」は物質的關係とイデオロギー關係の総体を意味し、両者關係のダイナミックスのなかで、社会的不足・不調整（福祉ニーズ）が生じると考えたのである。彼は、労働者（生活者）が労働組合運動はじめ市民運動を通して、資本蓄積（利潤追求）優先を目的とする資本家らに対抗し、不当な労働搾取や生活破壊・危機から生活構造防衛のために立ち上がることに着目したのである。

嶋田は哲学者ヘーゲルのことば「人は誰もがその時代とその国民の子である」を引用し、経済面における社会発展や民主主義の進展度合は、国によってそれぞれ異なり、日本においては第2次世界大戦を経て、絶対君主国家である天皇制国家から国民主体の民主主義国家に生まれ変わったものの、長期にわたる武

家支配によってもたらされた封建遺制が、国民大衆の精神性に多大な影響を与え続けていることは無視できないと指摘する。すなわち、個としての自覚が十分に育つことが困難な文化のもと、「寄らば大樹の陰」というように、個人主義的価値観の成熟度における未熟さが見られ、それはともすると個としての自我の弱さ、個人の有する基本的人権感覚の希薄さを生んでいるという。さらには、個が集団内に埋没し、集団のなかの個同士は、馴れ合い的な「義理人情」の世界を基本とする人間関係に陥りやすいとも指摘するのである。

社会福祉の精神性において、自立した個人自らが基本的人権の擁護に立ち上がることなしには、いつまでたっても、人権侵害の防止や予防は望めないと考えるのである。したがって、日本特有の文化や国民性を鑑みて、今後とも社会福祉が発展・成長していくために必要とされる福祉文化の醸成について考えることが求められている。

嶋田理論における「価値」について

嶋田は「価値」を社会福祉の重要な課題とし、「価値」に関して、人間の持つ「欲望（desire）」と「欲求（need）」を区別して考えた。すなわち、真の価値は、いくつかある「欲求」の中から、一番自分にとって望ましいとされる「欲求」を選び取っていく主体性が求められるという。時には、Aという「欲求」を犠牲にしても、必要とされるBという「欲求」を優先して選択することが、価値志向の態度であるとする。したがって、欲求の優先順位づけにあたっては、何が自分にとって必要かを考慮した上での主体的な価値判断が求められることになる。

嶋田は「欲望」に関して、「欲望」は新たな「欲望」を生み、刺激されることで欲望は増幅し、それはとどまるところを知らず、これによしとする限度や限界がないという。特

に物質中心主義の大量消費志向の社会にあっては、人間の物質的欲望は肥大化し、刺激されるばかりであることから、いかに物資中心主義の欲望をコントロールするかが現代社会における生活課題だという。そこで、求められる価値的態度として、「欲求」に関する必要性の優先順位づけということになる。わかりやすいいえば、今「何が欲しいのか」ではなく、「何が必要なのか」という自らへの問いかけであるというのである。そこには、「欲望」への従属という態度ではなく、「欲求」に関して自ら必要なものに対して優先順位をつけながら選びとっていき、主体的な価値判断が働くことになるのである。

嶋田理論における「正義」と「愛」について

嶋田は、「価値」を考えるにあたって、「正義」と「愛」の概念を用いた。正義は、「各人に属すべきものを各人に属させること」とし、「正義」は生まれながらにしての自由であり、かつその権利が保障されることであるとする。「正義」は法の支配する秩序ある世界の実現を目指す。人は誰もが生まれながらにして、基本的な人権を有し、それは尊重されねばならないという。権利には個人の自由が保障されることを前提とし、公序良俗と公共の福祉に反しない限りにおいて、誰もが他人の自由を制限し、ましてやそれを奪うことは許されないとする。

しかるに、「正義」はとかく、自分を中心に考える姿勢や態度が入り込みやすいとする。よって、ややもすると自分の有する固有の権利について自己主張をし始めるようになるという。人は互いに自分の権利にしがみつき、それを主張しあう結果、関係性において亀裂を生み、やがては分裂と闘争を引き起こしかねないとする。つまり、自己利益を保全するための権利を追求するばかりに、自分の周

囲に垣根をめぐらせ、そのなかに閉じこもることで、他人との関係を絶つ結果に至ると指摘した。

では、なぜ「愛」が「正義」とともに必要であると嶋田は考えたのか。「愛」には他者への関心や配慮、思いやり等がある。「愛」は自己中心性から脱却して、他者との共存や共生を目指す点で、単に「正義」の世界にとどまることをよしとはしない。「交わりのなかの自己実現」こそが、嶋田の強調した点である。しかも「正義は愛に先行し、愛は正義を全うする」が彼独自の主張であった。嶋田は、「正義」が実現した後であってこそ、「愛」は全うされねばならないと考えたのである。

それは自由と責任の自覚を兼ね備えた人間が、自己の欲望充足のために他人を利用するのではなく、かけがえのない自分と他者が互いに人格を尊重しあいながら、ともに自己実現していくことを目指したのである。嶋田は、マザーテレサの遺したことばを好んで引用した。「愛の反対は憎しみではなく、無関心です。この世で最も不幸なことは、お金や食べ物や着る物がないということではなく、ほかの誰からも必要とされないということです。そのこと以上に、生きる意欲や生きがいを奪うものは他にありません」と力説したのである。

嶋田が目にしたのは、哲学者マルチン・ブーバーの語る「我と汝」に見られる人間同士の実存的な出会いであった。人間は誰もが生まれながらにして、尊重すべき人格が与えられているとともに、かけがえのない一人の人間として、その尊厳が保障されねばならないという。しかも、人間同士の関係を相互依存的な関係として、互いが拝みあう（尊重しあう）関係を尊んだのである。しかも、キリスト教的人間観から、人は誰もが神によって創造され、愛されているのだから、存在すること（生きていること）自体が尊いのであり、人は互いに愛しあい、拝みあいの関係のなかで、

仕えあうことが大切であると説くのである。

また、嶋田が繰り返す、理解を誤ってはならないと強調した点として、「愛は正義を飛び越えてはならない」ということであった。先述したように、「正義」がまず初めに確立されてしかる後に、「愛」は「正義」を全うするという優先順位づけをしたのである。

嶋田は、「愛こそが全て」という論理だと、自己中心的な愛（エゴイズム）が動機となって、自己の欲望充足のために他人を利用しかねないと考える。すなわち、自分可愛さ（自己愛）ゆえに他人を便宜的に愛そうとするのであって、それは他人を愛することが真の目的なのではなく、他人という存在は、単なる自己中心的な欲望充足のための手段に過ぎないというのである。

かくして、嶋田は自己中心性から容易には脱却できない人間の本质を鋭く指摘した。ゆえにわれわれは、自分のなかにあるエゴイズムを率直に認め、かつ限界告白（自己を棄ててまで、他人を愛することはできない）をするなか、自己利益を犠牲にしてまで他人を愛しえない自分の弱さの自覚から出発して、他人を愛そうとする「意志（will）」と愛する「行為（do）」を重要視したのである。

嶋田理論のエッセンスについて

嶋田理論における社会福祉の定義について以下に紹介し、そのエッセンスについて述べていくこととする。

「社会福祉とは、その置かれたる一定の社会体制のもとで、社会生活上の基本的欲求をめぐって、社会関係における人間の主体的および客体的諸条件の相互作用により生起する諸々の社会的不充足、あるいは不調整現象に対応して、個別的または集団的に、その充足・再調整、さらに予防的処置を通して、諸個人または集団の社会的機能を強化し、社会的に正常な生活水準を実現しようとする公的並び

に民間的活動の総体を意味する。これらの諸活動は、損傷された能力の回復、個人的・社会的資源の提供、および社会的機能障害の予防の三機能を包含する」。

嶋田によれば、社会福祉の目指すところは、一つには人間の社会生活への適応であるが、それは単に属している社会への従順・順応を意味するものでは決してなく、人間の幸福や自己実現及び、社会平和の実現を可能にする基本的な人権重視の社会変革にある。よって属する国においての平均的な生活水準の達成というよりは、人間にとって望ましいとされる生活標準の実現こそが目標となるのである。

また、嶋田理論においての特徴は、社会体制論を核としながら、人間行動科学を基礎とした社会科学との力動的統合を試みた点である。嶋田は、単一個別科学に依拠するのではなく（例えば経済学等）、人間の全体性を理解する上で、諸社会科学（経済学、政治学、社会学、心理学、人類学等々）を学際的に統合するなか、人間行動と社会環境の関係性を重要視したのである。さらには、社会体制論においては、社会システム論を重要視しつつ、タルコット・パーソンの社会均衡モデル（social balanced model）には満足せず、ダーレンドルフの社会闘争モデル（social conflict model）に依拠しながら、資本蓄積を本位とする資本運動に対抗して、労働者をはじめとする国民大衆が生活構造を防衛しようと社会連帯運動を展開していくところに、社会福祉の存在意義と活路を求めたのである。

ところで、嶋田が期待した労働組合運動が弱体化している今日、労働組合に対して労働者の生活構造防衛のための防波堤となることを全面的に期待するのは困難となっている。他方、草の根的な NGO、NPO はじめ当事者団体・組織らが、自らの生活と人権を守る活動を展開していることは着目に値する。いわば、時代の主役は当事者をはじめとする一般市民、大衆である。生活者・当事者の立場

から共同して基本的人権を尊重・擁護する活動に取り組み、QOL（生活の質、人生の質、生命の質）を高めるための活動を推進しているところに、今日の新たな生活構造防衛のための大衆運動を見いだすのである。

嶋田が提起した生活構造防衛のための大衆運動は、今日形態において多様化しつつも、その目的とするところは、時代や社会は変化しても、基本的に何ら変わりがないと考える。嶋田は経済学者シューマッハの述べた「小さいものこそ美しい」を引用しながら、大量生産・大量消費の物質中心主義の時代傾向に対抗しつつも、今日でいうところのグローバル化一辺倒を目指すのではなく、ローカルなものを重要視することの大切さを説いた。それは嶋田が提唱した「ますます世界的に、あくまで日本的に」ということばに集約されているのである。

まとめ—嶋田理論の思想的背景について—

嶋田は人生訓として「人生の舗道に今日もよろこびの足あと一つ残さんとぞ想う」を挙げ、それを座右の銘とした。また、「他人に“喜び”を持ち運ぶ器となれ」というマザーテレサの姿勢こそ、生きる上での模範であるとした。「社会福祉は果たして、不幸な現実と直面し、苦難の状況に置かれている人間に対して、生きる勇気と希望をもたらす力となりえるのか」という嶋田の真摯な問いかけが脳裏をよぎる。

もしも嶋田が存命ならば、「現実は一層厳しく険しいが、希望はある」と答えるのではなかろうか。キリスト教の教えとして、「信仰」、「希望」、「愛」の3つがあるという。聖書が示すように、これら3つのうち最も大なるものは「愛」であることを、嶋田はその生涯において自ら模範を示しながら公私にわたり実践し続けた。中国の漢の時代に書かれた『易

経』において、「福祉とは、人生の極みなき齢を全うして、喜びに与ること」と記した一文に、嶋田はまぎれもなく福祉の原点を見たと違いない。

*なお、本研究は北星学園大学特別研究助成費により、2004～2005年度にかけて実施されたものである。

[参考・引用文献]

嶋田啓一郎『社会福祉体系論』ミネルヴァ書房
1980年